

宮 柊 二

島田修二 著

短歌シリーズ・人と作品 19

島田修二（しまだ・しゅうじ）

昭和3年8月19日横須賀市に生まれる。海軍兵学校生徒として広島県江田島で終戦。昭和22年、旧制静岡高校在学中、多磨短歌会入会。昭和28年東京大学文学部社会学科卒業。読売新聞社入社。この年発足したコスモス短歌会に加わった。昭和38年歌集『花火の星』（日本歌人クラブ推薦歌集）刊行、以降『青夏』『冬音』『島田修二歌集』のほか『宮柊二の歌』（近刊）がある。現代歌人協会理事。

短歌シリーズ 19
人と作品

宮 柊二

昭和五十五年十月二十五日 初版印刷
昭和五十五年十一月五日 初版発行

定 価 一 八 〇 〇 円

著 者 島 田 修 二

発 行 者 及 川 篤 二

印刷所 共 信 社 印 刷 所

発 行 所 株 式 会 社 桜 楓 社

東京都千代田区猿樂町二一八―十三
電話 二九五―八七七一（代）
振替 東京六一八〇二〇

序

現代短歌における宮柊二の存在は、きわめて大きく、重要である。短歌史の上からも、作風の上からも、また、戦前・戦中・戦後に分けての生のありようにも特筆されるものがある。それでいながら、従来は、研究書の類が少なかった。あまりになまなましく、身辺に存在するためでもあろうか。私自身、それを生涯の課題と思っていた。その基礎資料のつもりで書いていたエッセイを一冊にまとめる話があり、全作品を読み直しているときに、このシリーズの交渉を受けた。同じ歌人について、二つの形式で書くことにためらいがあったが、どのようにしてもこの歌人の本質に迫りたいという思いが、引き受けさせた。このシリーズが学問的なもので、考証を特徴とするものであることもその原因であり、いままでおろそかにして来た実証的な仕事を自身に課してみようと思ったのである。ちょうど、永年勤めていた職場を去り、心機一転して、新しい出発をしようとしているころであった。

事、志と違って、自由になるはずの時間が充分に制御することができず、約束の時日には甚だ心の満たぬものしかできなかつた。それは力が足りなかつた、という以外のどのようなことでもない。いまはもう少し距離を置いて、宮柊二と私自身の書いたものとの断層をみつめ、そ

これから学びとることのできるものを探したいと思っている。一度は筆を置くけれど、私の研究は終わったわけではなく、言わば始まったばかりなのだと思っている。その意味で、もし機会があれば、この本自体を増補改訂したいと思うし、疑義の点があればぜひとも指摘していただきたいと思う。

この本が出来上ったのはひとえに桜楓社のおかげであり、さまざまな協力をいただいたが、コスモス短歌会の友人たちの協力も計り知れぬものがある。個人の仕事とは思っていない。年譜は高野公彦氏作製のものであり、著書解題では久葉堯氏の協力を得た。間接的には「コスモス」の「宮柊二作品研究」に負う所が大きく、とくに初出の調査には大きく助けられている。寺田阿兄氏の労作『宮柊二作品初二句索引集』もいつも手許にあった。このような、多くの人びとの協力によって、どこにもかくにも、一応、宮柊二の作品世界を縦断できたことは嬉しい。そして、この本のきっかけとなった私の連載エッセイも、『宮柊二の歌』として近刊の予定である。

昭和五十五年十月二十日

島田修二

目

次

序

作家研究編

一、歌のはじめ……………九

1 大正元年という年…九 2 故郷・堀之内…二 3 家業の衰退

…二四 4 作文を斥け短歌を選ぶ…二六

二、「悲歌」の周辺―『群鷄』以前、『群鷄』……………三

1 『若きかなしみ』の公刊…三 2 その劇的性格…三 3 「悲

歌」の構造…元 4 『群鷄』の補遺について…三

三、一兵の生―『山西省』……………三五

1 戦争との遭遇…壹 2 兵から歌人へ…三 3 戦争短歌のリア

リティ…四三

四、孤独派の戦後―『小紺珠』『晩夏』『日本挽歌』……………四

1 戦後派として…四 2 『小紺珠』の多面性…五 3 『晩夏』

のひろがり…五 4 『日本挽歌』の調和世界…六

五、歴史の転回点で―『多く夜の歌』―……………七二

1 「コスモス」創刊…七 2 『多く夜の歌』の大きさ…七

3 「私記録録」の提示するもの…六

六、純粹歌人の道―『藤棚の下の小室』と『独石馬』―……………六四

1 職業としての歌人…六四 2 『藤棚の下の小室』の決意…六

3 『独石馬』の境地…一〇一

七、病苦の試練―『忘瓦亭の歌』とその後―……………一〇五

1 『忘瓦亭の歌』の闘病歌…一〇五 2 身体をうたうこと…一〇七

秀歌鑑賞編

目にまもりただに坐るなり	(二二)	土の鈴鳴らして昨夜は	(一九)
目瞑りてひたぶるにありき	(二四)	日蔭より日の照る方に	(二〇)
ほれぼれと笑まへる伎楽の	(二五)	つき放れし貨車が夕光に	(二二)
内暗き御刀砥師の	(二六)	肩寄せて綾目も分かぬ	(二三)
大君の醜の御楯と	(二七)	おそらくは知らるるなけむ	(二三)
角吹きて踊るヂブシーの	(二八)	ころぶして銃抱へたる	(二四)

ねむりをる体の上を	(二三)	家ごもりもの書きくらせり	(四六)
軍衣袴も銃も剣も	(二六)	この夏を充たしめたまへ	(四七)
津沱河の水の響の	(二七)	横浜に呼名風太郎の	(四八)
稲青き水田見ゆとふ	(三八)	行春の銀座の雨に	(四九)
うつそみの骨身を打ちて	(二九)	惨たる戦争態の	(五〇)
耳を切りしヴアン・ゴッホを	(三〇)	前掛をしめて前ゆく	(五一)
こゑあげて哭けば汾河の	(三一)	かかはりを互に持たぬ	(五二)
寒蟬が庭の立木に	(三二)	徐々徐々にころになりし	(五三)
たたかひを終りたる身を	(三三)	流れつつ蘂も芥も	(五四)
焼跡に溜れる水と	(三四)	七階に空ゆく雁の	(五五)
孤独なる姿惜しみて	(三五)	毎日の勤務のなかの	(五六)
鞭ふりて寒き路上に	(三六)	足の爪きれば乾きて	(五七)
罌粟のはなまぼろしに	(三七)	群れる蛸蚪の卵に	(五八)
ゆらゆらに心恐れて	(三八)	生きむ日のさながら悲し	(五九)
悲しみを窺ふことも	(三九)	わが無くばいかになりゆく	(六〇)
積みあげし鋼の青き	(四〇)	あたらしく冬きたりけり	(六一)
応答に抑揚ひくき	(四一)	新しきとしのひかりの	(六二)
いくばくかわれの心の	(四二)	ひらめきてわがが身内を	(六三)
地下足袋にわが踏みゆけば	(四三)	竹群に朝の百舌鳴き	(六四)
梅の花ぎつしり咲きし	(四四)	蠟燭の長き炎の	(六五)
笛を吹く緑の体の	(四五)	あはあはと陽当る午後の	(六六)

谷川に下りきたれば (一七)
 あきらめてみづからなせど (一八)
 扱きつつ新聞を鳴らし (一九)
 さまざまに見る夢ありて (二〇)
 わが妻が手相占へて (二一)
 怒をばしづめんとして (二二)
 人工の星廻る空 (二三)
 いざさらば別離と父が (二四)
 七階の下なる都心 (二五)
 青春を晩年にわが (二六)
 灯を明かく待ちゐし妻に (二七)
 早川のはやし響みに (二八)
 海じほに注してながるる (二九)
 萌えいでし若葉や蕪は (三〇)
 夜の道の車の中に (三一)
 空ひびき土ひびきして (三二)
 逸民の一人とおもひ (三三)
 島めぐる暗き潮に (三四)
 隣り家の硝子戸のいろ (三五)
 風かよふ棚一隅に (三六)
 仕方なく生くるならねど (三七)

日本のかの日復返り (三八)
 音長く劫より吹きて (三九)
 早風に竹の梢の (四〇)
 ビール飲む通夜の席に (四一)
 白きもの剛きもの、 (四二)
 黒人の宇宙飛行士 (四三)
 鳥にあり獣にあり (四四)
 労働者深く憩へば (四五)
 ビアノ鳴る音きこえて (四六)
 プラハにて人の緩れる (四七)
 雨のち吹く風ありて (四八)
 一涯なる感じ、 (四九)
 坂にしてわれは暮しを (五〇)
 使はるること無くなりし (五一)
 去りゆきし少年時、 (五二)
 單純に單純に (五三)
 長の子の机に思ひ (五四)
 人いふに驚き思ふ (五五)
 花菰の咲く花のみが (五六)
 原爆を阻まん国の (五七)
 またたびを食みては (五八)

わが少女処女となりて	(三〇六)
梅雨ゆふべ硝子戸のまへ	(三〇九)
わぎのちや吾が先長し	(三二一)
そよ、子らが遊びのままに	(三二四)

作品選	二二三
-----	-----

著書解題	二三一
------	-----

宮柊二略年譜	二三一
--------	-----

短歌索引	二九
------	----

装画 佐藤多持

作
家
研
究
編

一、歌のはじめ

1 大正元年という年

宮柊二は大正元年八月二十三日、新潟県北魚沼郡堀之内町大字堀之内三〇六に、宮保治、ツネの長男として生まれた。本名は肇^{はじめ}である。姉にカウがあり、弟妹に次男恭三、次女田鶴、三男梯伍がいる。五人姉弟の二番目であるが、長子としての自覚がつねにあった。

家は「丸末」という屋号を持つ書籍商であった。柊二が商家に生れたことは、作家としての人間形成に重要な要素になっている。商う業種が書物であることの重要さは誰でも気づくところだが、それ以上に、商家に生れたということに注意しなければならない。そのために、柊二が生れた大正元年という年を考えておく必要がある。

明治四十五年七月三十日、明治天皇崩御のち、一か月もたたぬうちに柊二は生れた。明治から大正への改元は、一つの歴史の断層に出会ったという偶然にすぎないが、これが内外における大きな転形期であったがために、商家であった柊二の家そのものに、そしてその生いたちに大きな影響を与えざるをえなかった、ということである。

新しい年号になって、二十数日という日にこの家では長男の誕生を迎えた。長男という意味

をこめてのことであろうが、「肇」という命名は、新しい時代を感じさせる。それは物心ついて、同じ学齡の遊び仲間の中にあつて、明治生れでなく、新しい「大正」の子供であるという認識となつて、精神形成の上に影響を及ぼさずにはいなかったと想像される。昭和のはじめに生れた、私自身の記憶からも、そう考えるのである。

その年、つまり明治四十五年に大正改元を知ることもなく、終二の生れる四か月前の四月十三日に死んだ石川啄木は、東京市電のストライキに触れて、明治四十五年がストライキの中に来たという事は、私の興味を惹かないわけには行かなかつた。何だかそれが、保守主義者の好かない事のだんだん日本に起つてくる前兆のようで、私の頭は久しぶりに一しきり急がしかつた。と日記に書いてゐる。日露戦争後の日本は、公債負担と軍事費の増加による財政難になやみ、不況は慢性化してゐたのである。

こうした状況下で、新潟県の山沿いの町でただ一軒の書籍商だつた「丸末」が、商業として比較的安定してゐたであらうことは想像できるが、作者が生れたころは不況のただなかにあつたことは間違いない。そして、難問をかかえてゐたのは日本だけではなかつた。植民地の擴張を競つてゐたヨーロッパの列強の国家的矛盾はついに一九一四（大正三）年第一次世界大戦をひき起した。日本の指導者たちにとっては、日本の發展のためのまたない機会であるとしてこれに乗り、八月二十三日、これもまったく偶然だが、終二が満三歳の誕生日に、ドイツに対して宣戦を布告したのである。目論見どおり、大正四年ごろから、日本経済はロシアとイギリスに対して軍需品の輸出をふやし、大正五年から六年にかけては大戦景氣を現出させた。終二が

物心ついたころ、日本は不況から好況に転じた未曾有の経済的繁栄の時代であった。

父の商売は町にただ一軒の書籍商だったから、小学校の先生、役人たち、まただんな衆などと呼ばれる当時の新知識者たちは、町に出ると必ず父の店に寄った。小学一年生だったころを私は覚えていて、島田清次郎の『地上』が、大変な勢いで売れていた。店の棚の上部をほとんど『地上』が占めていた。次々とくる客は、必ずページを繰ってみてそれから買うというので、そのために汚されてもいい見本二冊だけが下に置かれてあった。数年前に、倉田百三の『出家とその弟子』を百数十部も売上げたという。それが父と番頭さん自慢だった。自慢というのは、自然に売れるのを待つのでなく、客に内容を説き新文学を理解してもらうからだと言うのであった。

「わが歌のはじめ」という「朝日新聞」昭和三十八年二月十六日から三日間にわたった連載『石梨の木』所収の引用である。終二はさらに昭和五十四年十一月五日から二十八日まで、二十回にわたって「読売新聞」に「若くかなしみ老いて苦しむ」という「自伝抄」の連載をしている（『自伝抄』Ⅸ所収）。この二つの連載は終二の生いたちを理解するのに大きな手がかりとなる。終二が短歌に踏みこんで行った過程を、ここから探ってみよう。

2 故郷・堀之内

空ひびき土ひびきして雪ふぶくさびしき国ぞわが生まれぐに
夜もすがら空より聞こえ魚野川瀬ごと瀬ごとの水激ち鳴る

一昨年、故郷の小学校の校庭にこの二首の私の歌碑が建った。私の故郷は新潟県北魚沼郡堀之内という豪雪地帯で、魚野川に沿う細長い町である。私はこの町で生まれ、二十歳までの青春を過ごした。私の青春は決して平穩ではなかった。家業の衰退をこの目で見、かつ、言い尽くせぬ哀歎をしのぎ、とうとう故郷を出奔したのである。

「自伝抄——若くかなしみ老いて苦しむ」の冒頭、故郷・堀之内との関りをきわめて簡潔に要約している。

宮柊二の文学に、その風土が、その中でも魚野川が深くかかわっていることを指摘する人は多い。中山礼治「宮柊二に於ける清なるもの」(『コスモス』昭38・3、創刊十周年記念号)はその代表的なもので、文学的風土としての魚野川に焦点を合わせている。中山は同県人として、とくに親近感をこめて、(堀之内は魚野川に沿う一筋町の宿駅で、暑さも寒さも川と結びついているのであり、暁も黄昏も水色とともに心に沁みる、そうした土地である。)と言っている。中山は多くの作例をあげて、「清」の字の使用を拾い出した上で他の歌人と比較し、宮柊二の文学の質に「清なるもの」が根ざしていることを立証している。

作者自身も、魚野川の清流に触れた文章を書いている。

雪の深い原因は、国境から分岐した山脈が南北に走り、その中を、谷川岳あたりに源を発した魚野川が下ってゆき、その沿岸にあるため。つまり山に挟まれた地域、いわば大きな山腹のなかにあるような地形のためであろう。魚野川は水の青く澄んで美しい川だが、この川は越後川口で黄に濁る信濃川と合流する。

(「雪の里」「雪の里」所収)